

文献資料
紹介
〈第16回〉

下屋久村郷土史(承前)

山本 秀雄

先号に、大正三年刊『下屋久村郷土史』の内、湯泊と平内ひらうち平内尋常ひらうちじんじょう小学校の校区、並に尾ノ間おのまと小島こしま尾ノ間尋常高等小学校の校区を紹介したが、今回は安房あんぼうと船行ふなゆき粟穂尋常小学校の校区、並に原はらと麦生むぎお原尋常小学校の校区を取り上げることにする。

ただ残念なことには当時屋久島で最も文教の盛んであった岳南校の校区たけなん粟生くりおと中間なかまの分(資料)が見当たらないことで、よって今回で下屋久村の郷土史紹介を終ることにする。が、については本号の原・麦生の項に「月三十五日雨」と文字が見える。

私はこの月三十五日雨という言葉と屋久島は人二万・猿二万・鹿二万という言葉に興味があり、よく島の方にお聞きするが、返事は皆同じで「古来から云われて来たこと……」という事であるが、古来とはどこまで時代を遡ることが出来るのか、又文字の上では一番古い記録は何と云う本に出ているのか、是非ご教示を頂きたい。

殊に人二万・猿二万・鹿二万計人口六万という言葉は、人類と生物との共生を考える上で、「月三十五日雨」と云う言葉と共に初発の資料を知りたいものである。二つとも観光用語としても勝れた言葉である。

郷土史

大正三年下屋久村教育会編

粟穂 (安房) ・ 船行

位置面積

船行ハ下屋久村ノ最端ニシテ、北ハおとす川ヲ以テ上屋久村小瀬田ト境シ、南ハ安房トノ境ヲナセル船行川ニ至ル延長約壹里、面積二方里ニ近シ。安房ハ船行川ヨリ南麥生下境セル中橋川ニ至ル延長二里二合、面積三方里余ヲ有シ、船行ト共ニ屋久島ノ東北部ヲ占ム。(註) 當時は牧野・平野・高平に集落はなかつた)

地勢

安房船行ハ海岸ヨリ山岳ニ至ル間ノ原野部稍広濶ニシテ、他字ニ比シ稍広き耕地ヲ有セリ。山岳ハ太忠岳最高ク、入道、前岳、中島、モイヨ岳等之ニ次ギ、其他無数ノ重巒層嶽錯峙シ、全山鬱蒼タル樹木ヲ以テ蔽ヘリ。河流ハ安房川最大ニシテ遠ク源ヲ栗生、宮浦ノ二岳ニ發シ、曲屈十三里、安房港ニ注グ実二本島第一ノ大河ニシテ、幅六十余間、深キ所ハ六、七尋ニ達シ、河口所々湾曲アルヲ以テ船舶ノ碇泊ニ適シ、五、六町ノ間大船往來ス。其他、安房ニテハ花上川、中橋川、船行ニテハおとす川、田代川等ヲ大ナルモノトシ、小流無数ニシテ灌溉至ツテ便ナリ。然レドモ、傾斜甚シキヲ以テ降雨ノ際ハ耕土ヲ洗ハレ、水層瞬時ニ増加シ、激流急奔、交通ヲ遮ルニ至ル。

氣候

氣候温暖ニシテ冬季モ昼間ハ五十度(華氏)ヲ降ルコト稀ニシテ、年中氷霜ヲ見ルコト殆トナシ。夏季ハ涼風常ニ至リ九十度ヲ超ユルコト少ク、炎暑ノ凌ギ難キコト少ク、雨量多シ。

今下二大正元年度ノ氣象表ヲ示サン。

戸口

字	戸数	人		月別日数		
		男	女	雨	晴	曇
計	一七二	五三一	五二二	一〇五	一六六	六四
安房	一三四	四二二	四一六	八	一五	八
船行	三八	一〇九	九六	六	一九	五
全年	七〇・一	五〇	一〇五	八八	一六六	六四
一月	五八・三	五〇	一三	六七	一	一一
二月	五九・八	五〇	六	六八	一	一
三月	六二・六	五四	一五	七〇	一	一
四月	七一・五	六四	九	八二	一	一
五月	七四・五	六八	九	八八	一	一
六月	七七・五	〇	一〇	八八	一	一
七月	八四・〇	八	一一	八八	一	一
八月						
九月	八一・六	七五	一一	八八	一	一
十月	七〇・四	七〇	七	八二	一	一
十一月	六七・〇	六八	六	七七	一	一
十二月	六四・二	五〇	八	七五	一	一

産業
農業ヲ主トシ、漁業ハ単ニ飛魚ヲ漁スルノミナリ。
農業
土地

計	民有					官有		安房	船行
	其他	雑地	山林	畑	田	其他	原野		
五九一四町七七一〇	五町〇一九	一五六町八九一九	四九町九六〇三	二七二町七九〇一	二〇町六五〇四	〇町二四二六	八一町九一一八	五三二七町二九二〇	三二七二町八八〇〇
三四六八町五〇〇四	一町七三五	三一町五一〇四	二一町四五二二	五三町二七一七	三町三二一一	〇町一一二〇	八四町二〇一五	八四町二〇一五	八四町二〇一五

農産一覽

種別	作付段別	收穫高	価額	戸当		
				作付段別	收穫高	価額
甘蔗	五三町七九一〇	一四六二〇〇斤	一〇九六四四一〇	三畝〇	八五〇斤	六三九七五
水稲	二五町三四〇四	一五二石八八八	三三八八四八一	一四畝三	〇石八八四	一八四五六
陸稲	四九町三〇二〇	二九五石八四〇	五九一六四八〇	二八畝一〇	一七七二〇	三四四四〇
甘藷	六九町八〇〇〇	一九三六四〇貫	七三三四四〇〇	四〇畝〇〇	一一二〇貫	四四〇〇
麦	二四町〇八〇〇	八〇石一六〇	六四一四二八	一四畝〇〇	〇石四八〇	三三八四

計	粟	蔬菜其他
二二三町七八二四	二町八六二〇	八町六〇〇〇
二九〇六九四三二一町三五畝二	一四七六二〇	一〇三三三〇〇
一六九四一四	一〇二四三四	五畝〇〇
	一畝二〇	〇石〇八五
	〇四九五九	六四〇〇

畜産

種別	数	戸当	種別	数	戸当
牛	一六	〇、〇九	鶏	九四八	五、五一
馬	二八二	一、六四	豚	三四	〇、二

林業

林業ノ利益アルコトヲ知り、年々、各字ノ移植時ニ至レバ杉苗ヲ植栽セザル者殆ドナシ。移植地ハ共有山林ノ雑木ヲ伐採シテ、三村七民ノ割ヲ以テ植付ク。今正確ナル樹数ヲ知ルニ難ケレバ、之ヲ略ス。當地ハ地味肥沃、雨量多キ為メ、植樹ノ成育旺盛、年中發育ノ止マルハ冬季ノ一、二ヶ月ニ過ギス。

水産

漁具

安房ニ文蠮網七張、漁船、船行ニ文蠮網一張、漁船二艘アリ。

産額

種別	数量	価額	戸当
文蠮魚	一〇〇〇〇〇尾	一一二〇〇円	
布海苔	八〇〇斤	一六〇円	
雑魚		四〇円	
計		一四〇〇円	八円一四

移出入貨物

移出

種別	数量	価額	種別	数量	価額
黒糖	二九〇〇斤	九六七五円〇〇	材木		七九〇円〇〇
薪	二〇八エ	一〇〇円〇〇	下駄木	八六〇〇足	二二六円三〇
莪述	一五〇〇斤	一五〇円〇〇	樟脳	二〇〇斤	一〇〇円〇〇
椎茸	七〇斤	四八円〇〇	文鯨魚	一〇〇〇〇尾	二二〇円〇〇
雑魚		四〇円〇〇	賃銭		二八〇円〇〇
計		一五二八九円三〇	一戸当		八八円三二

移入

種別	数量	価額	種別	数量	価額
白米	二二〇石四〇	二八八九円六〇	反物		一七二〇円〇〇
肥料		二二四円〇〇	酒類	二石〇〇	七二〇円〇〇
煙草		六〇〇円〇〇	塩		六〇〇円〇〇
大豆	六〇〇石〇〇	八三三円〇〇	石油	二二〇箱	五四〇円〇〇
醤油味噌		二八〇円〇〇	素麵	二二〇箱	三六〇円〇〇
昆布		八〇円〇〇	砂糖		五〇円〇〇
雑穀		一〇〇円〇〇	魚肉類		一〇〇円〇〇
菓子類		五〇円〇〇	家具類		二〇〇円〇〇
下駄類	三五〇足	七五円〇〇	小間物		二五〇円〇〇
文具類		一五〇円〇〇	其他		一〇〇円〇〇
計		一〇九〇〇円〇〇	一戸当		六三三円二八

租税

租税	金額	一戸当
国税	三二七円一七	二二〇四・五
県税	五五二円二四	三三〇四・五二
村税	二〇六一円五三	一二二八・八五
薬価	七五〇円〇〇	四四六・八七
金利	一六五〇円〇〇	一〇〇〇・〇〇

通信・交通

本県庁ヨリ海路九十二海里（郡役所ヲ経、郡役所ヨリ三十海里）、宮浦ヲ経五里式合。

一、二日毎ニ此海路航通ノ汽船便アルモ、船体小ニシテ風波アルトキハ数日ノ不通ハ珍シカラズ。道路亦險悪橋梁ナキ河川多ク、降雨ノ時ハ出水ノ為交通ノ遮断セラルルコトアリ。然レ共、近時大ニ村民架橋ノ必要ヲ感ジタレバ、漸次全部ノ架橋ヲ見ルニ至ルベシ。安房港ハ河口水深ク船ノ碇泊ニ便ナレバ、帆船四艘アリテ毎月一、二回鹿兒島間ヲ航シ、又時ニ汽船ノ寄港スルコトモアリ。郵便物ハ尾ノ間局ノ配達区間ニシテ電報及其他ノ郵便事項ニ不便ヲ感ズルコト多シ。

学校・官衙

粟穂尋常小学校ハ明治十三年三月ノ創設ニシテ、粟穂小学校ト称シ、山元龍助三十二坪ノ茅屋根校舍ニ於テ下等小学ノ学科ヲ教授セリ。明治二十一年、校舍ヲ改築シ、桁行五間奥行四間ノ小坂葺トセリ。明治二十六年、船行簡易科小学ト合併シテ粟穂尋常小学ト改ム。明治三十二年、桁行十二間奥行五間ノ本校舎ト方二間ノ職員室ヲ附設シタルモノト、七坪半ノ教員住宅トヲ建築シ、明治四十四年、更ニ二百二坪五合ノ堅牢ナル校舍ト二十一坪二合五勺ノ教員住宅トヲ改築シタルモノニシテ、町ノ東北端、海ニ濱セル広潤ナ地ニアリテ町ノ光彩ヲ添フ。

屋久島小林区署保護区官舎、屋久島警察分署駐在所アリ。

神社仏閣

村社粟穂神社

正祀 天津日高彦彦火火出見尊

相殿 鷓鴣草葺不合尊

大山祇命、金山彦命

祭日 縁起考ニヨレバ三月三日、九月二十九日トアレドモ、今ハ一月二

十四日ヲ大祭日トセリ。

船行神社

正祀 大山祇命

相殿 益救皇大神

祭日 一月十一日大 八月二十日中 六月十九日小

此大神ハ妊婦安産に靈驗ありますによりて島中の者参詣絶えず、神の御

心として蚊をいみきらひたまへるよしにて、今も社頭拜殿の内には蚊ひ

とつも居らざるは誠に奇異なりけり。

川向神社

主祀 主馬判官盛久靈也。下総守季衡の子主馬判官盛国の子判官盛久

也。祭日 九月十九日。昔時ハ殊ニ靈氣盛にて、社山樹木ニ障る者ニハ

祟りをなせり。

宗教ハ全部法華宗ニテ、仏寺様ノ建物アレドモ何ノ資格モナク、唯墓守

ノ住宅タルニ過キズ。此ニ：不明：記録等ハ廃仏ノ際焼失シタレバ、抛ル

ベキモノ一モナシ。

名勝古跡

安房川

河口ヨリはねつるベニ至ル七、八町ノ間、水深ク船ヲ行ルコトヲ得。之

レヨリ約一町毎ニ急瀬アリテ、三、四瀬ノ間、唯丸木舟ヲ上スルコトヲ得。

此間、兩岸絶壁、樹木鬱蒼トシテ深谷ヲ蔽ヒ、猿群ヲ見ルコト珍シカラズ。

上ルニ随ッテ河幅愈狭ク、境ハ益幽邃ナリ。晩春ノ候此処ニ遊バンカ、

躑躅ハ兩岸ニ点々トシテ一層ノ景ヲ添フ。夏ノ夜、月下ニ船ヲ下流ニ浮ベ

涼ヲ納ルル客モアリ。

浦浜

安房ノ東端湾曲セル白沙一帯ノ海浜ヲ浦浜ト称ス。後ハ山ヲ負ヒ前ハ

安房川ヲ隔テ崎田ノ鼻長ク海中ニ突出シ、左方白沙ノ尽クル所青松ヲ

戴ケル奇石怪岩突兀トシテ海ニ走り出デ、猛虎ノ怒レルガ如キモノ、臥牛

ノ眠レルガ如キモノ、拳ゲテ数フベカラズ。気暖ニ波穏ナルノ日、小舟ヲ

浮ベテ釣糸ヲ垂シ、満月浩々タルノ夜、足ヲ此所ニ運ベバ、真ニ神心ヲ洗

フニ至ル。一度風波起ランカ、怒濤岸角ニ挫ケ飛沫天ニ飛ビ、其壯觀人ヲ

シテ快絶ヲサケバシムルモノアリ。

面影ノ水

安房川ノ傍ナル岩隙ヨリ湧出スル島中第一ノ名水ナリ。清ニシテ、往

来ノ人影此水ニ臨ミ鏡ニ対スルガ如クナレバ、「古来面影ノ水」ノ名アリ

トゾ。鹿兒島ノ画工木村探元此水ニテ画キ試ミ、大イニ賞美シテ鴨川ノ水

ニ並ブベシト云ヒタリト伝ヘ云フ。昔時ハ瀧壺ヲナセルヨシナルモ、水勢

ノ為ニ穿レテ今ハ唯其形ノミ残レリ。

天柱石

千嶺萬壑ヲ過ギ登ルコト五里、太忠岳ノ絶頂ニ柱ヲ立テタルガ如キ自

然石アリ。高三十三尋、周圍亦同ジ。之ヲ天柱石ト称ス。此石ノ根ニ大盤

石自然ニ四角ニシテ礎ノ形ヲナセリ。之ヲおかさ石ト云フ。天柱石ノ八合

目ニ大ナル穴アリ。時ニ貝ヲ吹クガ如キ音ヲ発ス。此穴鳴ルトキハ大風吹

起ルトゾ。島民太忠権現ト称シ、秋ノ彼岸ニ総代二名ヲ参詣セシム。又

之ニ随伴スル参詣者多シ。

平家城

船行川ノ上流矢本岳ノ麓ニアリ。濠ヲ廻ラシ、所々ニ石垣ノ跡ヲ残セル

ヲ見ル。

城山

村落ノ上手向地ニ、安房川ヲ北ニ他ノ三面ハ濠ヲ廻ラシ、幅員凡五町

歩ノ古城跡アリ。七、八十年前迄ハ大門残レリト云フ。又四、五十年前迄ハ石ニテ造レル縁アル鍋ノ此処ニ残レルアリシモ、島民之ヲ打碎シ其碎片ヲ盗ムモノアリテ、遂ニ一片ヲモ余サザルニ至レリトゾ。此城ノ北部、安房川ニ面シタル断崖ノ所ヲはねつるベト云ヒ、此処ヨリ用水ヲ採リタル所ナリト伝フ。

大平

安房川ヲ南ニ距ル約半里、開道ヨリ海岸ニ至ル原野ヲ大平字ト云フ。此処ニ天然石ノ墓三基アリ、島民之ヲ大平殿ト称ス。此墓ヨリ南方数町大山ト云フ所ニハ無数ノ墓石アリ、此辺開墾スル時ハ碗ノ如キ陶器ノ碎片ヲ出スコト多シ。蓋平家ノ一族大平ト云フ者此処ニ居ヲ定メシ所ナラン。又此辺ニハ斧ノ如キ石器ヲ多ク出セリ。村民之ヲ雷石ト云フ。此処ニハ五安寺ト云フ寺モアリタリトゾ。

堂山

平家城ヨリ海岸ニ至ル原野ヲ堂山字ト云フ。此所ニモ天然石ノ墓石三基アリ。之ヲ村民ハ堂山殿ト称ス。之平家一族ノ居所ナリシナラン。此所ニテ金の匙ヲ掘出シテ持帰レルモノアリシニ、忽チ病アリテ又元ノ所ニ埋メ置キシヨシナルモ今其所ヲ知ルニヨシナシ。

泊如竹ノ墓

安房墓地ノ入口ニアリ。寛陽公(十九代光久公)ヨリ給ハリシモノナリ。上ニ笠石アリ、中ニ柱石アリ、其高三尺余下ニ一重ノ台石アリ。柱石ノ中央ニ養善院日章靈位、右側ニ明暦元年、左側ニ五月十五日トアリ。

安房村ノ中程河畔ニ祠アリ、東ニ向ク。翁ノ死体ヲ真ニ葬レル所ニシテ、村民掃除参詣ヲ怠ルコトナシ。翁終ニ臨ミ、「我死セバ此ノ所ニ石塔ヲ建ツベシ。我鎮守トナリテ此村ノ災殃ヲ滅セン」ト云ヘリトゾ。翁ハ我安房ニ生ル、幼ニシテ非凡、安房ノ本仏寺ニ入りテ日蓮宗ノ僧トナル。長ジテ京師ニ適キ法華ヲ本能寺ニ学ブ。後西帰シテ文之ニ学ブコト八年ニシテ成ル。文之敬待シテ常ニ如竹翁ト称ス。慶長中藤堂高虎聘ニ応ジテ書ヲ講ズ。寛永七年、高虎卒シテ嗣君学ヲ好マズ。辞シテ京都ニ適キ経ヲ講

民宿 おふる

全ての部屋から美しい海山が眺望できる、
家庭的な雰囲気 of 民宿です。

トーフ料理が自慢です!



- ピアノが弾けます●全室TV・冷暖房完備●駐車場有り
- ★マイクロバスで送迎いたします。

1泊2食5,000円から

☎09974-2-0255・1757

代表者■島中忠雄

鹿児島県熊毛郡上屋久町宮之浦277-2(宮之浦港のすぐ近くです)

ズ。聴徒多シ。既ニシテ翁屋久島ノ本邑ニ帰ル。俸禄余金ヲ以テ親族郷人ノ貧者ニ施セリ。九年琉球ニ適ク。翌年、明王由檢其臣社三策ヲ遣ハシテ中山王尚豊ヲ冊封ス。時ニ明人梁沢民ニ倣テ屢經義ヲ討論ス。沢民ハ秀才ノ聞ヘアルモノナリ。翁ヲ敬重シ、其居所ヲ顧天庵ト名ケシトゾ。中山王礼シテ師事セリ。時ニ琉球文教未布カズ土民礼ヲ知ラズ、翁教フルニ人倫ヲ以テス。上下愛戴シテ徳ニ帰シ化ヲ仰グ。先是琉球經書ヲ讀ム皆漢音ヲ用ヒテ和讀ヲ知ラズ、翁授ルニ文之点ノ四書ヲ以テス。是レヨリ琉球始メテ和讀ヲ知ルニ至レリ。翁居ルコト三年ニシテ本邑ニ帰ル。禄ヲ郷党ニ賑スコト始ノ如シ。既ニシテ寛陽公(十九代光久公)ノ命ニヨリ本府ニ召サル。蓋時ニ寛永十七年頃ナラン、寛陽公江戸ニアリ水戸侯光圀ニ向フテ曰ク「余、儒ヲ学バントス。當時誰ヲ師トセン。候曰ク「貴藩ノ如竹其人ナリ」ト。公因リテ翁ヲ召セリト。其講義ヲ聴キシ郭内ニ一寺ヲ建設シ、本仏寺ト号ス。翁ヲシテ住セシメ、禄三百石ヲ賜フ。翁經ヲ講ジ、君道政事ニ至リテハ顔ヲ犯シ直言諱スル所ナシ。公素ヨリ寛量ナレバ甚信用シ給ヘリ。正保元年翁病アリテ暇ヲ乞ヒ、本邑ニ帰ル。公翌年船ヲ遣シテ翁ヲ迎ヘ、經ヲ講ズルコト始ノ如シ。後老衰ヲ以テ辞シテ本邑ニ帰リ、貧者ニ施与セリ。安房ノ地タル、用水遠クシテ土人苦ム。即自費ヲ以テ明星峯ヨリ出ル川ヲ引キ、其間五町、石ヲ碎キ地ヲ鑿リ川ヲ村中ニ通ズ。於是闔村大ニ喜ブ。之ヲ用水川ト稱シ、今ニ至リ猶其慶ニ頼ル。既ニシテ翁浪花ニ到リ、寓止シ、朱学ヲ教授ス。是時翁既ニ八十二近シ。猶能ク清爽強力ニシテ祁寒大暑ヲ以テ廢セズ。居ルコト数年ナラズ本邑ニ帰ル。明曆元年五月十五日、本邑ニ卒ス。春秋八十六、翁ノ為人ヤ剛毅ニシテ大節アリ、徳器粹然トシテ人望シテ畏服ス。其学実行ヲ本トシ、博涉ヲ務メズ、詩賦ヲ喜バズ、今所伝ノ詩文ヲ多ク見ズ。最四書集註ニ精シ、終身僧形ニシテ本仏寺ノ住持タレドモ、儒業ヲ主トス。平素能ク人ヲ教育シ、面前ニハ其過ヲ告ゲ退ケバ其ノ善ヲ稱ス。仁信ノ心深ク、行状廉潔ニシテ見識明達ナリシカバ、上下皆敬礼セザルモノナシ。郷党今ニ至ルモ徳ヲ仰ギ、常ニ如竹先生ト稱シテ、忌日ニハ必業ヲ休ミ、翁ノ遣セ

ル踊ヲナシ酒肴ヲ供シ厚ク祭典ヲ行フ。翁二関スル口牌二、三ヲ左ニ記サン。安房川ニ深淵アリ。河泊アリテ、土民時ニ亡失スルコトアリ。一村患トセシニ、翁親ヲ深淵ニ臨ミ河泊ヲ警戒セシカバ、是ヨリ其怪止ミシト。屋久島ヨリハ平木ヲ藩侯ニ收メ、藩侯ヨリハ米ヲ下賜セラレシモノナリシガ、此平木ヲ採ルコトハ如竹ニ始シト言ヘリ。其以前ノ大樹ヲ伐レバ必ス殃アリトテ甚畏レテ決シテ伐ルコトナカリシヲ、翁憂ヒテ愚民ヲ諭サント思ヒ、「世ノ為、予、山上ニ通夜シ、木ヲ伐ッテ材ヲ用フルコトヲ祈ラシ」ト人々ニ誓ヒ、一七日山中ニ通夜シ、下山ノ日諭シケルハ、「以来伐ラント思フ樹ニハ前夜ヨリ斧ヲ立テ掛ケ置クベシ。翌朝其斧倒レ居ザレバ殃ナシ。殃アルモノハ必ズ斧倒レントノ山神ノ告ヲ受ケタリ」ト。是レヨリ伐樹材ヲ採ルニ至レリ。申酉ノ両日ニ工事ヲナセバ必火災アリトハ、翁ノ遺訓ナリトテ、今ニ至ルモ此兩日ハ決シテ工事ヲナスコトナシ。之レ何ノ故ナルカヲ知ラズ。

人情風俗

男子ハ丁年ニ達スル頃ヨリ、類家若クハ近親ノ家ヲ撰ビテ泊宿ト稱シテ此家ニ宿泊シ、男女相近ヅキテ、父母ノ承諾ヲ得以テ婚ヲ結ブ。妊娠後ニ父母ニ相談スルモノモ亦多シ。愈婚約整ヒ、新婦ヲ迎フルモ猶泊宿ニ宿泊シ、一子ヲ挙グルニ至リテ始メテ自宅ニ宿泊ス。祝宴ノ如キハ極メテ簡單ナルモノニシテ、唯其双方ノ父母並ニ媒介人等ノ小宴ニ止ルノミ。葬儀

全部日蓮宗ナルヲ以テ仏式ニヨル。会葬者甚多ク、近親ノ人ハ自宅ヨリ墓所ニ至ル迄号泣止マズ。当日ハ区民総テ業ヲ休ミシガ、近來此風絶エ、青年ハ薪尅荷ヅツ葬家ニ贈ルコトトセリ。一週間ハ親類ハ相集リ●ニ余念ナシ。夜ハ念仏ヲ唱フルノ客群集セリ。忌中ノ女子ハ白若クハ紅ノ布ヲ髮ニ纏ヘリ。

一般ニ祖先ヲ敬フノ念ハ深く、祖先ノ祭日ハ勿論、朔望其他ノ吉日ニハ

必ス汀ニ到リ、清浄シ、白沙ヲ持チテ墓參ス。然レドモ言語ニ敬語ナク、粗野ニシテ礼ヲ知ラザルモノ多ク、商売心ハ割合ニ發達シ、為ニ利慾心深ク、公共ノ事業ヲ疎カニスルハ慨スベキコトナリ。

原・麦生

一、位置 屋久島ノ東南部ヲ占メ、西南ハ境川ヲ以テ尾之間ニ界シ、東北ハ中橋川ヲ以テ安房ニ接ス。前面ハ渺漠タル太平洋ニ面シ、背部ハ巍峨タル八重岳ヲ控フ。

一、区画 部内中央ヲ貫流スル鯛河ヲ境界トシ、原、麦生ノ二部落ニ分テリ。

一、面積 約一・五平方里 原 式百八十六町九反七畝 麦生 式百八十一町一反六畝

一、地勢 背部ハ山岳重疊シテ地勢高峻ニ東太平洋ニ向ヒテ傾斜セリ。從ツテ河流モ多クハ東流シ、鯛ノ河、御内匠河、中橋川等アリ。諸川ノ下流地方並ニ沿海地方ニ僅カニ平地アルノミ。地味ハ概シテ肥沃ナラズト雖モ、原ハ麦生ニ比シ一般ニ良好ナルガ如シ。鯛ノ河ハ八重岳ニ連続シタル諸川ノ集水東流シテ轟瀾ニ注グ。流程永カラズト雖モ激流奔湍粟ヲ生ズ。故ニ古來此河ヲ以テ屋久島ノ親不知トモ見ヌリシナリ。之即チ平時ハ水量多カラズト雖モ、一朝降雨アランカ、忽ニシテ水層増加シ、急流奇岩ヲ嚙ミ、飛沫天ニ沖ス光景、真ニ壯絶ナリト謂フベシ。旅行者ニシテ時ニ激流ニ凌ハレ半死ノ災ニ罹リタル者アルノミナラズ、又川止メノ災ニ遭遇スルコト數フルニ違アラズ。斯ル不便ハ幾度モ架橋ヲ促シタルモ、亦激流ニ破壊セラル。然ルニ世ノ進運ハ一日モ此架設ヲ怠ルヲ許サズ。現在ノ橋梁ハ針金ヲ利用シタル工事ニシテ完全ナリト言フベカラズト雖モ、応急ノ架設部民ノ勞トシテハ又多シト謂ツベシ。明治四十三年、本河流域ノ荒蕪地ヲ開拓シ、灌漑利用シテ水田ヲ開キ、

現在ハ約三十町ノ水田ヲ耕耘シツツアルモ、近キ将来ニ於テ此倍加ノ開拓ヲ見ルヲ得ベシ。

一、岬角 原ノ北方ニ諏訪崎アリ、麦生ノ東ニ平瀬崎アリ、何レモ奇岩屹立シテ風波荒シ。

一、雨量ハ、内地ニ比シテ多シ。古來屋久島ノ雨ヲ形容シテ、一カ月三十日ノ雨アリト言フ。

一、氣候 西北部ニ高山ヲ控ヘ東ハ暖流流レル太平洋ニ面スルヲ以テ、氣候温和ニシテ、極暑ノ候ト雖モ華氏九十度ヲ超フルコト極メテ稀ニ、極寒ノ候ト雖モ五十度ヲ下ルコト少シ。斯ノ如クナルヲ以テ冬季平地ニ霜雪ヲ見ルコトナシ。故ニ据付芋トテ、毎年八、九月頃甘藷ヲ植エ、翌年ハ、九月ニ至リテ收穫ス。

一、産業 当地八十年前マデハ半農半漁ナリシガ、其後農業ヲ本位トシテ營ミツツアリ。將來ハ如何ニヤ、識者ノ充分ナル熟考ヲ要スベキモノナリト信ズ。

漁業ヲ主トシテ鰹、飛魚漁ナリ。鰹漁ハ十年前マデハ帆船ニシテ拾艘余ヲ有セシガ、近時石油發動船、蒸氣機械船ノ發明セラルルヤ、從來ノ帆船ハ遂ニ庄倒セラレ中止スルノヤムヲ得ザルニ至レリ。然レドモ飛魚ハ従前ノ如ク毎年五、六月頃産卵期ニ於テ漁獲スト雖モ、大漁ヲナスコト稀ナリ。

一、農業ハ、鰹漁ヲ中止セシ余波トシテ經濟界ノ大不振ヲ來タシ、為ニ區民一同大ニ覺醒ノ感ヲ抱キ、農業ヲ主トシ村ハ農業技手ヲ聘シテ指導ノ任ニ當ラシメ、以テ肥料・耕作・手入等ニツキ改良ヲ促シツツアレドモ、未ダ十分ナリト云フベカラズ。然レドモ、一昨年来、当地方ニハ甘蔗ノ栽培尤モ適當ナリト唱導セラレ、今ヤ一郷一心、之ニ全力ヲ注ギツツアレバ、遠カラズ製糖業ヲ以テ此ノ不振ノ經濟界ヲ振興スルノ期アラシカ?

一、商業ニ従事スルモノ絶無ト云フベシ。之レ資金ノ欠乏ニ起因スルナラシカ、日用品ヲ売買シ、農産物・水産物等ヲ購買スルモノ、何レモ外来

人ノ手ニ依ル。

一、工業ハ、日用家具・家屋・船舶修繕ヲナス者ノ外ニ、別ニ工業ト称スベキモノナシ。

一、林業ハ、個人或ハ団体ニ於テ苗樹ヲ仕立テ、共有地・個人有地ニ何レモ競ツテ松・杉・樟ノ植林ヲナスト雖モ、未ダ部落ノ需要ニ応ズルニ足ラズ、尚ホ他ニ供給ヲ仰グノ状態ニアリ。然レドモ麦生部落ニ於テハ、毎年杉材ノ輸出価格三百円以上ニ及ブ。

一、家畜ハ、農業ヲ主トスルヲ以テ牛馬ノ飼養ヲ欲望シツツアリト雖モ、逼迫シタル経済ハ未ダ俄カニ此冀望ヲ充スヲ得ズ。サレド漸次其数ヲ増スノ実状アレバ、遠カラズシテ一戸一頭ニ及ブノ時アルベシ。

一、生産品及産額（但シ重要品）

品 種	飛 魚	甘 藷	砂 糖	米	麦	莪 述	其 他
原	十七万匹	七千俵	五百樽	六百五十俵	五十五石	五千斤	
麦生	八万匹	六千俵	貳百樽	三百五十俵	拾五石	千五百斤	
計	二十五万匹	壹万三千俵	七百樽	千俵	七十石	六千五百斤	
価格	三三七五円	六千五百円	四五〇〇円	三三〇〇円	五六〇円	三九〇円	三〇〇円

一、輸 出 高

品 種	飛 魚	砂 糖	莪 述	材 木	下 駄	其 他
数量	二十五万匹	七百樽	六千五百斤	板五百間	六千足	
価格	三三七五円	四五五〇円	三九〇円	三五〇円	百二十円	二百円

一、輸 入 高

品 種	白 米	塩	砂 糖	煙 草	大 豆	石 油	反 物	素 麵	焼 酎	肥 料	其 他
数量	八十俵	二七〇俵	六樽		三十石	百箱	五九〇反	一〇〇箱	七石五斗	三五〇俵	
価格	五六〇円	三三四円	六〇円	五〇〇円	四〇〇円	四〇円	七〇〇円	三三〇円	四五〇円	二三六円	千円

一、船舶数 当地ニハ大形ノ船舶ヲ碇泊スルニ適スル港口ナキヲ以テ、今ヤ僅カニ飛魚漁ニ用フル小形ノ伝馬船三拾余艘アリ。何レモ其過半ハ陸揚ゲヲナシ、必要ニ応ジ之ヲ使用スルモノナリ。

一、交通 当地ハ交通不便ノ地ニシテ、幅僅カニ一間内外ノ里道アリテ、尾之間、安房二通ズ。坂路ノ全部未ダ開索充分ナラズ、為メニ岩石露出シ且ツ河川多キヲ以テ、漸ク人馬ノ通行ニ過ギズ。サレド橋梁ハ將ニ架設ヲ終ヘシトシ、道路ノ掃除モ稍努メツツアレバ、決シテ昔日ト識ヲ全フセズ。又、海ニハ漁船アリテ沿岸ニ往来スルノ他、時ニ種子島ト航海ヲナスノミ。

一、通信 当地ニハ郵便局ノ設置ナケレドモ、近ク尾之間ニ郵便局アリテ電信事務ヲモ取扱ヒ、其集配区域内ニ属スルヲ以テ、不便ヲ感ズルコト少シ。

一、官衙 当地ニテ官衙ト称スルハ、唯ダ官有林保護区官舎アルノミ。

一、学校沿革 本校（原尋常小学校）ハ、明治十三年三月ノ創立ニシテ、明治二十年三月、勅令第十五号（明治十九年）ニ依リ原簡易科小学校ト改メ、明治二十六年一月、麦生簡易科小学校ヲ併セテ原尋常小学校トシ、二学級ニ編成シタルモ、当時鯛ノ河二橋梁ノ架設ナカリシ為、麦生ニ仮教場ヲ設置シタリ。明治四十三年四月ヨリ三学級ニ編成シ来リシモ、更ニ本年ヨリ再ビ二学級ニ編成セラルルニ至レリ。然ルニ昨年度以前ノ四カ年ト本学年度トノ児童ノ比較ハ拾数名ノ増加ヲ来シ、且ツ本年三月末校舍破壊シ現在ハ狭隘ナル仮校舍ナルニ拘ハラズ、反テ学級ヲ減ゼラルルニ至レリ。

一、神社仏閣 原、益救神社ハ無格社ニシテ祭神ハ彦火火出見尊ニアラセラル。由緒詳ナラズ。例祭毎年六月十五日ナリ。

麦生、弓矢八幡神社ハ無格社ニシテ、今ハ大山祇神社、正八幡神社等ヲモ合祀セラル。何レモ大古ヨリ奉祀ニシテ、由緒詳ナラズ。

一、宗教 原、麦生共ニ日蓮宗ナル西之表本源寺説教所アリ。区民一郷一統本宗ヲ信ズ。本島ノ本宗ハ徳川氏ノ太平マデ本能寺一致派ナリシガ、

徳川氏ノ末葉ヨリ尼ヶ崎本興寺ナル本門八品派ニ属シテ今日ニ至レリ。昔時ハ麦生二本慶寺、原二本隆寺ナル寺号アリシモ、現在ハ上記ノ説教所タルニ過ギズ。サレド信仰ノ程度ニ於テハ格別衰微ノ風ヲ認メズ。又敬神ノ思想ニ乏シカラズ、慶スベシ。

一、名所 轟淵ハ鯛ノ河ノ下流ニ当リ、サシモノ急流集マリテ滝トナリ、迅雷轟々淵ヲナス。周囲拾数町、群巒重疊シテ四方ヲ環繞シ、水ハ深ク色ハ濃ク、一碧宛然明鏡ヲ開キタルノ景色ハ眞ニ名状スベカラズ。故ニ一度此処ニ船ヲ浮ベ釣ヲ垂レテ遊バンカ、蘇東坡ノ赤壁ノ賦ヲモ思フ。東方ノ口ハ海ニ接シ、小船ノ出入ニ適スベク、時ニ暴風時ノ避難港トモナリ得ベシ。

一、持右衛門岳 一爆一壊ノ下ニ原全部ヲ圧殺センズ雄勢ヲ示シテ巍峨タル山岳アリ。呼ンテ持右衛門岳ト言フ。旅行ノ人ハ其名ヲ知ルト知ラザルトニ拘ラズ、必ズ仰ギテ通行シツツアルベシ。登山路程約一里半（土地ノ人ハ一里ト云フモ、旅人ハ二里ノ思アルベシ）。幾多ノ瀧アリ、頂上ニ達スレバ祠アリ。大ナル平岩アリ、俯瞰一眸ノ裡ニ麦生・原・尾之間・小島・平内ヲ認メ、前面渺タル大洋ヲ眺ム。後方ニハ山岳重疊ス。乃チ仰ゲバ巉岩高ク聳へ、俯スレバ一頓直下ノ思アリ。春秋ノ候杖ヲ此処ニ曳キ涼ヲ頂上ニ入ル快、言フベカラズ。

一、人情風俗

婚禮ハ一定ノ格式ナシ。然レドモ、男女多ク十七、八歳頃ヨリニ、三集マリテ一定ノ宿泊ヲ為スノ風習アルガ如シ。斯クテ遂ニ男女相知リ、父母一族不知ノ間ニ既ニ百年ノ伉儷ヲ契約シ、後父母ノ許ヲ得テ公然夫婦トナルガ如シ。婚禮ノ式トモ別ニ儀式立タル事ナク、極質素ニ挙行セラレ、広ク人ニ知ラシムルニアラズ。又、新夫新婦ト云フモ唯名ノミニテ、華麗裝飾、一生琴瑟相和スベキ瑞言ノ式ナリトハ見ルヲ得ズ。（式法略ス阿々）。

葬式 全部仏式ナリ。会葬者多ク、近親ノ人ハ其宅ヨリ墓所ニ至ルマデ号泣漣々タルヲ以テ、漸ク他人ニ擁セラレテ往來スルヲ例トス。又当

日ハ区民全体業ヲ休ミ、甲意ヲ表ス。然シ麦生ニ於テハ近来此風ヲ脱シ、親戚ニアラザル青年ハ全部、午前中三時間、不幸者宅ノ荒蕪地開拓ノ勞ヲ取ルニ至レリ。又近親ノ者ハ、男ハ白布ヲ帶トシ女ハ赤若シクハ白布ヲ髪ニ纏ヒ、一週間ハ一日三回墓參ヲナス。又其ノ際ハ喪主ハ頭部ニ衣服ヲ被リテ忌中ヲ表ス。

一、神事

一般に神事ヲヨク行ヒ、敬神ノ風アリ。即チ毎月十五日、二十八日、朔日ハ、毎朝、白砂ヲ取り參拜シテ祈願スルノミナラズ、左ノ如キ場合ニハ如上ノ行ヒヲナスガ如シ。

イ、初メテ遠方ノ地ニ旅行セントスルトキ
ロ、自己ノ冥福ヲ祈ルトキ
ハ、願成就祭ノトキ
又迷信ノ行動少カラズ。

イ、飛魚時期ニ於テ降雨幾日トナク連続シタルトキハ、既ニ漁獲シタル飛魚ヲ腐敗セシムルノ恐アルヲ以テ、日和祭トシテ神前ニ祈願スルコト。

ロ、不漁ニ際シ大漁アランコトヲ神前ニ祈願シ、恵美須祭ヲナスコト。
ハ、伝染的悪疫（麻刺利亜、麻疹）等ノ流行スルニ及ビ、悪魔払トシテ、青年輩、法螺貝吹ヲキ石油缶ヲ敲キテ部落中ヲ徘徊シ、最後ニ板片ニテ造リタル船ニ辻々ニ貼リタル紙片ヲ取集メ、此船ニ積ミテ海ニ流スガ如キ等。

一、一般禮儀

貴賤長幼ノ別至ツテ乏シ。敬詞ノ使用法ニ至リテハ殆ンド主客ノ別ヲ知ラズ。唯ダ親方ナル金持崇拜ノ念比較的盛ナルガ如シ。